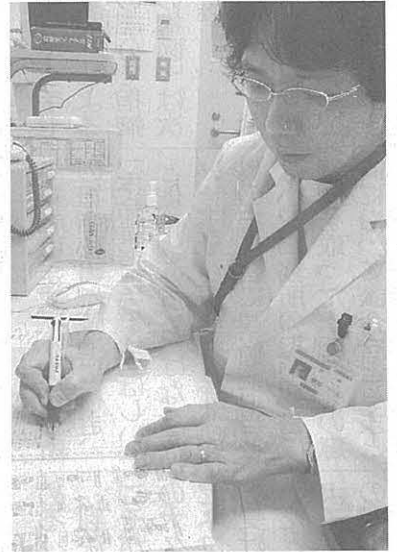


医療ルネサンス No.5172 ●病院の実力 がん薬物療法専門医 3/6



「余命」の意味について、図を描きながら説明する柳原一広さん(京大病院で)

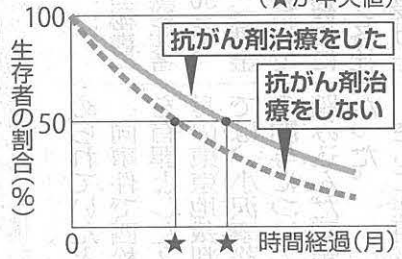
京大病院の外来化学療法部に、沈んだ面持ちの患者が訪れた。京都府内に住む40代の男性会社員。「別の病院で『進行した肺がんなので、このままでは余命3、4か月』と言われ、ショックで……。治療してもしょうがない気がします」呼吸器の抗がん剤治療を担当する柳原一広さん(47)は少し考え、説明を始めた。

正確な情報で理解促す

「治療しなかった場合、100人中50人が亡くなるまでの期間は4か月くらいですが、それは統計上のデータに過ぎない。あなた自身に当てはまるかどうかはわかりません。人の寿命は、同じ期間で一斉に亡くなるわけではない。いわゆる『余命』は、同条件の患者の半数が亡くなるまでの期間を示した「生存期間中央値」で表されることが多い。男性会社員は「そう聞いたら、少しだけほっとしました」と表情を緩めた。柳原さんは説明を続けた。抗がん剤治療で生存期間中央値が延びることがわかって

命を縮めては意味がないので副作用対策が欠かせないこと。男性は治療に取

●生存期間中央値のイメージ (★が中央値)



り組むことを決めた。現在、がん薬物療法専門医の資格を持ち、抗がん剤を専門に扱う柳原さんは、以前は呼吸器外科医。肺がん治療に熱心に取り組んでいた2002年、副作用の少ない「夢の新薬」として注目された新しい抗がん剤イレッサを、この病院でも早く採用すべきだと主張した。ようやく採用が決まったこの年の秋ごろ、副作用

による死亡が次々に発覚し、社会問題になった。柳原さんは「あのころ、医師も患者もマスコミも、安易に新薬に飛びついた。社会全体が未熟だったと思う。でも、それを教訓に、その後の抗がん剤はより慎重に使われるようになった。問題の反省が、今に生きています」と話す。京大病院では独自の「安全管理ノート」を患者に渡し、毎日の体調を詳細にチェックするなど、慎重な副作用管理をしている。

くらし 家庭